

小栗永言『復古四大家譜』紹介

——真淵・宣長・千蔭・春海——

山本和明

簡略ではあるものの、いちはやく千蔭や春海の伝を記した書に国会図書館所蔵『先哲譜』一冊（請求番号一八九—二八七）がある。その書の存在は、森銑三「村田春海」「村田春海遺事」「平田篤胤雜記」（中央公論社『森銑三著作集』人物篇七所載）等に引かれており、周知のものとなつていよう。その概要をいま、『大日本歌書綜覧』記事より引用してみる。

『先哲譜』 一卷写 小栗永言 県居、宣長、千蔭、春海四人の伝及び気吹屋叟の話合せて五人の先哲の伝なり。始に天保十三年九月成るよしあり。気吹屋叟の話は一名ひとり松といひて天保十四年十月の奥書あり。

（上卷三一五頁）

「まつ屋」蔵書印のある本書は、「天保十三年九月 栗園隠士小栗永言記」との年次の序文のあと、「先哲譜」と内題され、「縣居の譜」「鈴屋の譜」「芳宜園の譜」「織錦齋の譜」の順に四人の伝記事項が記されている。また「織錦齋の譜」末尾に以下の文面を載せる。

此書、もとおのが永こと、冊子の中にあらはし置つるを、そは巻数も定まらず、大部にもならむものにしあなれば、人々の見やすからむため、別ちに一少冊になしたぬるがよかんものと、友だちのそゝのかしつるまゝに俄に自序をものしてかくは物しつ

永言の書き蓄めたものの中から、友人の勧めに従い、分けて一冊としたのである。「三哲小伝」「鈴屋翁畧年譜」などの既刊書に満足しきれず、真淵・宣長の兩人、さらには「たちばな、たひらの二叟のうへは、いまだものにもみえねば、あたらをしくこもこたび撰なし」たのだとする本書序文からも、その成立事情が窺えよう。ここまで墨付二五丁。そのあと「栗乃屋著書真本之記」なる

印記が筆写される。丁変わりがあつて、「天保十四年十月」の奥書をもつ「氣吹屋叟の話一名ひとつ雲」が七丁続き、再び「栗乃屋著書真本之記」印影筆写がある。安政六年刊行「書画薈粹 二編」（勉誠社「近世人名録集成」第四卷所収）に載る小栗永言の筆跡をみても明らかに別筆であるし、印記筆写の具合からみて、転写本と覚しい。さらに言えば、前者四人について記したものは「譜」とあり、氣吹屋のみ「話」とある。奥付にみる執筆時期も異なることから、「先哲譜」と「ひとつ雲」とが、ある段階で合綴あるいは合写され、一冊の「先哲譜」を構成したものと、ひとまず推察される。

さて、今回紙面を借りて紹介するのは、前者「先哲譜」とほぼ同文で、その筆跡や印記などから小栗永言自筆と断定できる「復古四大家譜」なる一冊である【後掲写真及び翻刻参照】。写本一冊、袋綴。縦二四・〇糎×横十七・一糎、栗皮色無地表紙。表紙左肩題簽に自筆にて「復古四大家譜 全」。題簽上に朱印「永言秘笈」を押捺。墨付二三丁。一面九行書。「天保十三年九月 小栗永言記」とする序文に続き、「四大家譜」と内題され、以下「縣居翁」「鈴屋翁」「芳宜園翁」「織錦齋翁」の順に記載される。但し、「織錦齋翁」のあとに、先掲執筆事情を示した文面はない。注目されるのは、本書にも自序が存在し、「先哲譜」とほぼ同文である点である。先の引用中「俄に自序をものして」とあることをみれば、「復古四大家譜」の成立は、原「先哲譜」とほぼ等しい時期と思われる。「先哲譜」が「人々の見やすからむため」のものとするならば、「復古四大家譜」は自身によって「秘笈」された手控といった性格とみることができるのではないだろうか。

ところで、嘉永五年六月という奥付をもつ永言著「詞の塵」上下二冊（国会図書館所蔵 請求番号二二二―一四七。筑波大所蔵本は未見）は七十七篇からなる随筆集であるが、その中にも「本居宣長の伝」「橋千蔭の伝」「平春海の伝」が収録される。内容は「先哲譜」「復古四大家譜」にほぼ同じい。序に「とし頃、なにくれのことゝもかいしるしおかれたるを、書きよめて『詞のちり』と名づけ」とある如く、永言は、自身書き蓄めた冊子の中から、繰り返し抜粋、清書していた節が見られる。「譜」といい「伝」というその名称を変えながらも、先学達の伝記は、繰り返し返されるほどに愛着をもった小篇だったのである。

さて「復古四大家譜」の内容だが、例えば「鈴屋翁」の項などはほとんど「鈴屋翁畧年譜」を資料として用いており、その文面まで同じというのも何箇所かある。「織錦齋翁」に記された歌評は、「贈稻掛大平書」をもとにしていうようである。とまれ、「天の下

に其名いかづちのごとゞろき、此あづまのみやこにては、歌人とだにいへば、其比は千蔭、春海といはぬ人なむなかりける。こゝに此道真盛になりたるは、ひたぶるにふたりの叟のいさほによれり」とする永言による同時代評は、いち早く二人の伝をものしたと同様、貴重な発言と言える。余談めくが、「鈴屋翁」記事中、永言は「此をしへ子の中にも殊に勝れ人は、藤井高尚、平田篤胤なり」として、高尚、篤胤を高く評価する。文中「こは高尚の孫高枝、いんとし江戸に下りし時、まのあたりに聞し事なりけり」とし、『詞の塵』下巻にも「吉備津の宮の神主藤井高枝主に贈る消息文そへて故長門守高尚ぬし三年の祭祀に手向ける歌並序」なる消息文を収め、高尚の孫高枝と永言との交流が確認される。篤胤との関わりは、天保五年入門の安藤直彦に連れられ、篤胤の講説を聞くに至つてからのものであるが（『詞の塵』所載「安藤直彦につかはす消息」）、『氣吹屋門人録』には永言の名を確認しえない。篤胤没後の天保十四年十月の奥書をもつ「氣吹屋叟の話、一名ひとつ松」は、「没後国々の名あるをしへ子とはかりて、今の鉄胤ぬしも物せられむを、こは大人をしたひまつるあまり、かりそめの心やりに物し」たものであり、その存命中も「おのれ永言はしも、つねにまゐり馴れて、かの古学の講説の、ち、ともすれば、おのが好む道とて、かの歌学のあげつらひをき、しに、心にはあらねどやむことをえず、はしくとり出つ、さとし給へり」というほどに、学びの道とは別の意味で、その親密さが伺える。

著者である小栗永言（オグリナガコト）は享和二年生。姓は小栗氏、名は信篤（信累）。字は永言。もと幕府両番の士にて、可粹（醉）、寂庵、歌樵、寛栗翁、栗乃屋、遊戯坊、栗園隠士、栗園主人などと号す。海野遊翁を師として和歌を学び、東小唄と称する曲節を作つた港崎可粹という狂歌師その人である。「幸なくしておほくの子等をさきだてしより」（『詞の塵』自跋）、壮年にして仕えを退き、隠者としての生活に入った。「ものゝふの家になまれて、馬をはせ、弓いるわざはいふもさら也。なにくれのことゝもつとめられしが、はやう世中の常なきことをさとり、中くよにまじはらんよりは、とて頭おろし、園のうちに草の庵を結び、そを（寂庵）と名づけ、独心をすまして、常に念仏をとなふるとまには、月花を友として歌よむことをたのしみと」（同序）したという。

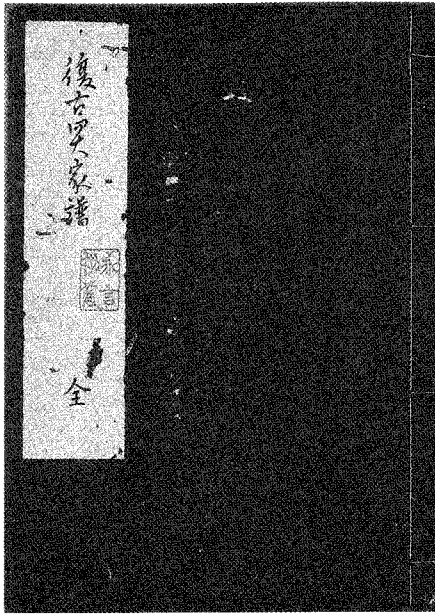
『詞の塵』に収まる七十七篇は、その隠者ぶりを偲ぶよすがとならう。『魯文珍報』第十八号にその略伝を掲出するが、今はこれを略す（『森銑三著作集続編』第一二巻「閑読雑抄」八一頁参照）。『国書総目録』によれば、『東小歌合』港崎可粹編（阪大 夏之巻 一冊写本）、『詞の塵』二冊写本（嘉永五年序、国会・筑波大）、『先哲譜』小栗永言編（国会）が確認されるばかりで、『書画薈粹

二編』が挙げる『風月餘談』『寢覚草』は現在所在不明。明治十一年十二月十四日没、享年七十七。

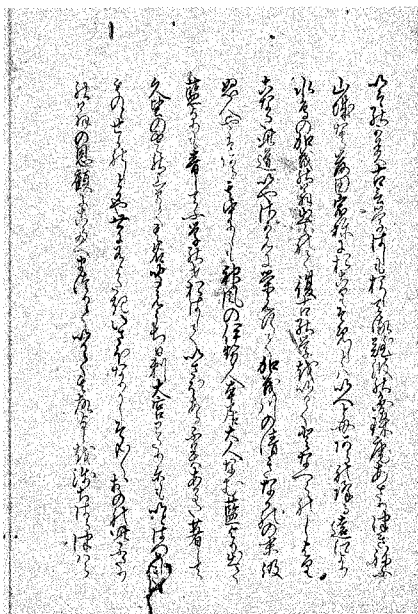
伝記資料としては不備のあることは否定できないものの、『復古四大家譜』（先哲譜）には、いまだ貴重な発言が溢れている。研究的にみても、多少の参考になるものがある。翻刻に際し、任意に濁点・句読点・括弧等を付し、割書はへゝで括った。改行なども適宜施し、読みやすい本文作成に努めたつもりである。なお、「ひとつ松」は既に森銃三「平田篤胤雜記」に全文翻刻されている。併せてご参照いただきたい。

〈付記〉 資料の閲覧等で、国会図書館古典籍資料室にお世話になった。深謝申し上げます。

表紙



序



【翻刻】

復古四大家譜 〔永言秘笈〕 全

いそのかみ古言学はしも、おして難波の円珠庵あざり、つきねふ山城なる荷田宿祿におこりそめしとはいへども、あられ降る遠江より、水鳥の加茂の翁出られて、復古の学をいかでとなへられしよりこなた、此道いやさかえに榮え得て、加茂川の清きながれの末汲ぬ人やはある。其中にしも、神風の伊勢人本居大人なむ、藍より出て藍よりも青してふ学の才おはして、いさほあるふみあまた著して、久堅の雲の上まで其名聞え、うち日刺大宮わたりにも、いとほづかしきものとせられしとかや。世に有がたきいさほなりかし。そもくおのれ、此ふたりの翁の恩顧にこたへまつりて、いかで其故よしを浅ぢはらつばらかに書見ばや、とはやくより思ひおこし、は、さきに世に出て人も知りにし『三哲小伝』『畧年譜』等のあかぬ所あれば也けり。つきて又思ふに、かの芳宜園、織錦齋のふたりの叟たちの上は、いまだ物にも見えねば、こもこたび撰なして、ふたりの翁のしりへにもせむとて、其事跡を何くれの書どもよりあさり出て、かくはなしぬ。もとより山の井の浅き学のしわざなれば、もれたるもあらむを、そは又心ある人、重ねてよくあらためてよ。

天保十三年九月

小栗永言記

四大家譜

縣居翁

あがたるの翁は、其先山城国加茂成助縣主の末にて、永久三年山城より来りて、遠江国敷智郡浜松の庄岡部なる加茂の新宮の御社の祝となれる、師久主より七代にあたりて、懸まくもかしこき東照大神の御軍にしたがひまつりて、いさほあるによりて厚く愛でさせ給ひし政定ぬしより五代の孫なり。かの大神の五徳におはします田安の殿にめされて、皇国学の道の博士として、延享三年よりつか

へ奉りて、宝暦十年つかへをしぞき、明和六年十月晦日になも、齡七十あまり三にして身まかり給ひぬ。さて其なきがらをば、江門の南、荏原の郡品川の東海禪寺の中、少林院のうしろの山に葬ける。其ころ「玄珠院真淵義龍居士」と贈号せしを、其後改めて「加茂縣主之墓」とたひらなる石に彫付られたりとぞ。文化の頃、橋千蔭の、師の世にいませし時のこと、はた其遠祖のこと々も、つばらかにしるして碑といふものになして、かのおくつきのかたはらにたてたり。其をり、村田春海のよまれたる長歌など、いとあはれなるがかりしが、今こゝにはことしげきまゝしるさず。としごとの九月晦日に、此おくつきの山ふみなむ例となりて、千蔭の世にありしころは、引あみのたえずみやびをたすをそゝのかしいぎなはれしを、かの人身まかりての、ちは、清水浜臣のとはれしも、今はなき人の数に入りて、やうく此事たえなむとせしを、春海のむすめたせ子の刀自といふが、今も此つどひをなして、かの磯山寺のおくつきまうでをなせしとか。あがた居の翁なむ世に盛なりし時、田安の殿より葵の紋の御衣を賜り給へる時の哥とて、今も人の口碑にのこりありしは、

あふひてふ あやの御衣をも 氏人の かづかむものと 神やしりけむ

こは加茂氏なれば也。翁は、今の世の人とはおこなひも言もことにして、うち見にはさかしきが、たはおくれて、心おそきさまに思はれしかど、たまさかにいひ出給へることに、敷島のやまと心をあらはして、一言としてみやびならざる事なかりきとか。筆とりてもの書給ふにも、五百とせも経にけん筆の跡の如くなりとか。こはあまたとし、よるひるとなく古言をのみ心にしめて、家より調度に至るまで古しへによりて、いさゝかも後の世の事を、耳にふれ心にとめたまはざりしかば、おのづから古しへ人の心になりもて行て、其心よりいひ出もし、物書もし給ひしによりて、しか有けむかし。されば、歌のうへはおして知るべし。翁、名は真淵。こは敷智の郡より出たる名也とぞ。衛士ととなへ、又はじめ三四ともいふ。庭を田居のさまにもものして縣居と名づけられしよし。著所五十三部。今世に重用する所、『万葉考』『古今集打聞』『伊勢物語古意』『百人一首初学』『祝詞考』『冠辞考』『語意考』『歌意考』『文意考』『書意考』『国意考』『縣居家集』『縣居雜録』其他あまた玩めり。をしへ子凡三百人餘りあるが中に、世に名の聞えたるは、小野古道、藤原宇万伎、村田春郷、揖取魚彦、加藤千蔭、村田春海、本居宣長、荒木田久老、栗田土満、餘の子、筑波子などあまたあり。さて此翁を高田與清の賛すらく、

敷島の やまとの国の 石上ふる 言の葉は 呉竹の よをふるまゝに ちりほひて うもれしあとを 水荳の そこかきわけ
とり出し 玉のこがねの こゑ高く 世に聞たる あがたるの うしのみかげに なづみなく まよふ隈なく 諸人は まなび
の道を すゝみ行かも

鈴屋翁

すゞの屋の翁は、平高望朝臣裔、権大納言頼益卿六世の孫、本居縣判官平建郷十七代小津定利の二男なり。其先伊勢国司北畠家に属し、又蒲生氏郷にもつかへし家なりとぞ。享保十五年五月七日子の刻に、紀伊殿のしろしめす伊勢の国飯高郡松坂の里に生れ給ふ。初名を小津富之助と称しけるとかや。十七八歳の頃より歌道に心ざしありしかど、師をもとめてまなびしにもあらず。たゞみづから古き新らしき集ども、うるに任せて見られしとか。宝曆はじめのとし、兄定治、江戸にて身まかれしかば、子なきによりて、翁、家を嗣給ふ。此時はじめて江戸に下られしが、ほどなく国へ帰られにき。さて其後、京へとりて漢学又薬師の業を学びとり給ふ。其頃、家号小津を改めて舊苗本居に復し、名をも宣長、字を舜庵とあらため給ふ。又の年、契沖が著せる『百人一首改観抄』『古今餘材抄』『勢語臆断』等を見給ひて、はじめて古学の志を起し給へりとして、時にとし廿七。明年七月、京より帰りて小児科の医を業とし始給ひき。是兼て母刀自勝子の意也とぞ。其頃、縣居翁の著されたる『冠辞考』を見給ひて、ます／＼古学の志を定め給ひけり。あるとし、真淵翁、伊勢大和山城わたりものして江戸にかへるさに、松坂に一夜やどり給へるをりにまうで、古学の旨をとひき、つひに名簿を進めて、をしへ子となり給ひぬ。此時三十二歳。是よりしばらくふみ通はして、ものまなびし給へりとか（真淵翁今年六十五歳）。明和元年、『古事記伝』の稿をはじめ、安永元年三月、吉野にまうで給ふ。此時の紀行を『蓑笠日記』とぞいふ。其記の末に、

ぬくもをし 吉野の花の 下風に ふかれきにける すげの小笠は

天明はじめのとし、家の名を「鈴の屋」とつけ給ふ。寛政の二とせ、齡六十一に成給ふ此時、みづからの像をうつして哥よみて書給ふ其歌は、

しき島の やまと心を 人とはゞ 朝日に匂ふ 山桜花

同じく六年には、紀伊殿にめされて若山にまゐり給ひ、御まへにて「大祓詞」「古今集序」等を進講し、また「詠歌大概」を本文として、歌道を説き聞せまゐらせ給ふとかや。こたび奥医師の列に召加へられて俸を賜り、又御紋の後にくさぐさの禄をさへ賜り、世にありがたき此道のめいぼくとよろこび給ふあまり、詠出給へる哥、

われはもよ みけしたはりぬ さき草の みつ葉の葵の あやのみけしを

又のとし、字を中衛と改め給ふ。同十年、「古事記伝」全成。没後、文政五年に至て、此書全部四十餘巻刻成。紀の殿、賞したまひて、御みづから其題号を書てとり、子大平ぬしに賜けるを、彫りて巻の首に載す。翁七十一歳の時、伊せの国飯高郡山室の妙楽寺の山に、みづからなき跡の塚をきづき、桜をうゑてしるしの石を建給ふ。其をり詠給ふ哥、

山室に 千とせの春の 宿しめて 風にしられぬ 花をこそ見ぬ

又、其年の花の盛に、

寺の名の 妙にたのしき 春日かな 花のさかりを おもふとぢ見て

おなじ時帰るさに、

我宿と 苔の下にて みんな花を 見捨てけふは 先かへるかな

此おくつきは、妙楽寺の山の小高き所にて、木深くしげりたるに、はるかに伊勢尾張の海つら見わたして、富士の峯さへかすかにみゆるとなん。かくて翌とし享和元年、人々のこひ申けるによりて、四月そのの日旅立て都にまうのぼり、四条烏丸のひむがしに宿り給ぬ。此とき、翁のもとにつどひてもものまなびするともからおほかり。国々よりもきゝつたへてまゐりあひたるもの、三十一国の人なりとぞ。おのづから哥の文字の数にあひしも又奇しき事也けり。此ほど、やむごとなき御わたりにては、閑院の宮、妙法院宮よりも度々めして、哥こはせ給ふ。其外、中山大納言忠尹卿の御もとへもたびゝ召れて、延喜式の祝詞を進講し、此をり御息宰相中将忠頼卿をはじめ、九人の雲の上人たち、つどはせ給ひて、ねもごころに聴聞ありしとぞ。又四条のやどりにては、「万葉集」「源氏物語」の講説せらるゝ時にも、おほくの上達部たち、うちゝ訪ひ来まして聞給ひ、はた哥道の事どもとひきゝ給ひしとか。日野中宮権大

進殿、

和哥の浦に ゆくへをたどる 海士小ぶね 今より君を かちとたのまむ

などうたひ給ひしとかや。外々の公達も、おほく哥よみて送り給ける。中に、富小路新三位貞直卿は、古風の長きも短きも、殊によくよみとゝのへてたまひけり。其御歌どもは、

山城の とはにかつぎて 伊勢の海の 玉の光に 我もあはばや

また、うまのはなむけに

送本居大人婦伊勢国作詞一首並短哥

神風の 伊勢の国なる 松坂の まつかひありて うす日さす みやこにのぼり 草まくら 旅やどりして ならの葉の
名におふ宮の ふることの 万の言葉 朝よひに とをかたらふと 梓弓 音に聞つゝ さす竹の 大宮人も しづたまき
賤き人も 明くれば 日のくるゝまで 夕されば 夜のおくるきは みしゝもの 膝打ふせて 玉かづら 絶ることなく
我も又 をしへを受けて つがの木の いやつきゝくに いそのかみ ふるの中道 ふみ見れば あやにたふとく 分いれば
あやにかしこみ はしきやし まなびのおやと 大船の おもひたのみて たびまねく いゆきとひしに あら玉の
月も経ずして 朝鳥の 朝たちゆけば いはむすべ せむすべしらに なく子なす したひうらぶれ 玉鐸の 道に立出て
ふるさとの 二見の浦の ふたゝびも さきくいまして かにかくに のぼり来ませと 菅のねの ねもごろにのる
けふの別れ路

天津水 あふぎてぞ待 玉くしげ 二見の浦の 名をしたのみて

とよませ給へるも、其中のひとつふたつ也。かくて翁の身まかりぬる後になり、その故にやありけむ、

伊勢の海の 清き渚に けふよりは 我たまとする 玉をひろはむ

と口ずさび給ひけるとぞ。さて、みやこのぼりの事どもは、をしへ子石塚龍麿、遠江より京にまゐりあひて、松坂まで送りまゐらせ、其ほどのことをしるしとゞめて『都日記』といふを、翁の見給ひて、うたよみて書そへ給へり。其歌は、

たがはずよ 有し都の 面影も また立かへり 見る心地して

六月十二日、松坂の家に帰り給へりとぞ。其とし九月十八日より心ちわづらひ給ひけるが、やうくあつしくなりて、廿九日小の暁、身まかり給ひぬ。時にとし七十二と聞えたり。十月二日、かねて定め置給ひつる山室山の嶺の墓所に葬めまゐらす。碑に「本居宣長之奥墓」と銘せり。此文字は、既にみづから書置給へりとぞ。こゝは松坂の里より南の方にあたりて、道法二里斗ありけりと。さて、翁の諡を「秋津彦美豆桜根大人」と称へ申す。常に手馴良し給ひぬる桜木にて造りたる笏の形したるものを、靈牌として諡を書つて家にまつりけりとやらん。又、法の名は「高岳院石上道啓居士」ととなへ、翁生涯の限あらはされたる書籍五十有餘部。其中、世に重用せらるゝ所、道のふみにては「古事記伝」「玉銚百首」「神代正語」「神代卷髻華山蔭」「葛花」「玉くしげ」「大祓詞後釈」、歌道の書にては「石上私淑言」「古今選」「草庵集玉箒」「古今集遠鏡」「新古今集美濃家つと」「折添」「源氏物語玉小櫛」「言葉の玉の緒」「紐鏡」「玉霞」「初山ぶみ」「鈴屋集」「玉勝間」、猶くさくあり。門人四十余国の人、あはせて四百九拾人。内、没後の弟子といふもの三人あり。其中に世の人に知られたるは、村田並樹後改一柳春門といふ、長背真幸、城戸千楯、橋本稻彦、斎藤彦麿、萩原元克、石塚龍麿、夏目鑿麿、田中道麿、藤井高尚、平田篤胤等也。此をしへ子の中にも殊に勝れ人は、藤井高尚、平田篤胤なり。高尚は神の宮人なれば、道の事は更也、歌学のかたに専らとちから入てつとめられて、倭文におゐては、古しへ今にわたりてひとつの姿を書著し、いみじく物せられしほどに、翁より「文章一家」の印可ありしとかや。こは高尚の孫高枝、いんとし江戸に下りし時、まのあたりに聞き事也けり此高尚は、吉備津の宮の神主にて、在世に「三寸鏡靈神」といふ勅号ありしとぞ。いと有がたき事也けり。天保十二年八月望。七十有餘。篤胤は皇国学の才に勝れて、翁の考残されし事ども、はたさらぬ古今未発の論ども書著して、道のまなびのいさほ人なりかし。此外、山河の音に聞えし人すくなからず。実子春庭ぬしは、眼病のいたつき重くして、めしひ人となられしかば、稻懸大平を養ひて、紀の殿につかへしむ。此ふたりとも、ものまなびも哥もいとくたけて、なる神のごと名のとゞろきけりとぞ。さておのれ本言、鈴屋翁をしたひまつるあまり、御霊によみて備へまゐらせし歌、

こゝたくの 人をさとし、 いさほこそ 六十まりむつの 国にのこらぬ

とことはに 山室山に いますとも あまかけり来て みたま幸へよ

芳宜園叟

芳宜園叟は、姓は橘宿祢、名は千蔭、通称を加藤又左衛門といふ。市の下司也けり。父枝直、歌道のすき人にて、叟の九つといふときより、哥作ることをみづからをしへ、十四といふとし、縣居の翁をちかきわたりにまねき任せて、かたみにむつまひかはされつゝ、千蔭叟をなん、翁のをしへ子となしにける。さるからに、朝に夕に此道おこたらず学びえ給ひしほどに、はてくは天の下に其名いかづちのごと、とゞろき、此あづまのみやこにては、歌人とだにいへば、其比は千蔭、春海といはぬ人なむなかりける。＊こゝに此道真盛になりたるは、ひたぶるにふたりの叟のいさほによれり。千蔭叟は、手かくわざにすぐれ、みやび心深ふおはし、とぞ。春海叟は、ふみ作る業とまなびのちからにたけて、かたみに車の両輪の如くなり、ものにもみえたり。さて、千蔭叟としおいて、つかへをかへしまつり、とことには行かふなり所をなむ、隅田河原の西の峯、石浜の神明の宮る近き所に、川つらの庵おかしうつくりて、春は堤の花にあくがれ、夏はおはしまにすゞ風をまちとり、秋は水の面に影宿す月にうそぶき、冬くれば雪のながめに同じ心の友を待つゝ行かよひ、心をなんやられけるにぞ。ひたすらの世捨人にもあらねども、みやびにのみあかし暮し給ひしことは、かの家の集を見て、大かたはおしはかられぬべし。されば、久堅の雲の上までも其名聞えて、寛政の十とせといふとしのやよひ、一條右のおほひまうち君、此あづま大城へまで来給ひし御供に参れる、大舍人頭保考縣主して、妙法院一品宮へ今上の御兄宮より、千蔭が哥の中、「閑居山家」などの哥十首書て奉るべきよしおほせられて、色紙十ひらたまはりければ、いとくかたじけなけれど、詠おける歌どものうちをえらびて書て奉りけりとか。又のとし、宮の坊官刑部卿寛常法印、こゝにまゐりけるついでに、かしこきおほせごとども伝へけるがうへに、千蔭が歌、御心になかへるよしの御歌を御みづからかゝせ給ひて、かの法印して賜りけり。其後も、宮のかゝせ給へる御絵に哥書てよ、宮所の廿四勝、はた八宣樓の歌、種々の絵のうたなど奉るべきよし、折々仰ごとありてよみて奉りぬとか。それめでさせ給ひて、二たび迄御硯をたまはり、はた内より御たうばりのわた絹など賜りけるとかや。文化二年ことしやよひの秋十日、こゝにくだらせ給ひて、天徳寺の御旅居へ召しけるによりてまうのぼられければ、うちくのおまし所へめしてをがまれさせ給ひて、なにくれと御物語などせさせたまひ、おほむま衣一くだり、くさくのもの賜り、御しとねのかたへより御みづから

御筆をとり出させ給ひ、物書てよなど仰ごと有ければ、仰ごとのまに／＼書て奉りぬとか。それよりしばらくまうのぼりて、其月つごもりに、都へかへりのぼらせ給はむとて出立し給ふ。其時に、叟、御名残りを惜しみまつりて、詠て奉りしうた、

はこね山 松のあらしも こゑたて、 こえます君の みさきおふらん

とこととはに みなぎる河の あら浪も 君をかしくこみ 立もさわがし

君が行 野山の鳥に 身をかへて しばしとだにも なかましものを

ながらへて 嬉しとおもひ 老せずば みやこまでもと かつなげくかな

あすよりは みやこの空をあふぎつゝ 千世ませとのみ いはひまつらん

宮には、いみじうよろこび愛でさせたまひ、御暇給りてまかでられし時、こゝのおほやけよりまるらせられしとて、わた二むら給りぬとかや。誠に世にありがたきめいぼくには有けり。又、富小路新三位貞直卿よりも、加茂季鷹縣主へ消息し給ひけるついでに、千蔭がよみ歌のうち、二首殊に愛でたまへるよしにて、みづから書てまゐらせよと有ければ、書てまゐらすとて、それに添て、

むさし野や 花かずならぬ うけらさへ つまるゝ世にも 逢にける哉

とよみてまゐらしけりとか。家の集を『うけらが花』と題せしは、此歌より出たるよし。扱、其後は貞直卿みづから消息し給ひて、はて／＼は詠給ひし歌をさへ、はる／＼と添削をこひ給ひしとぞ。時に文化二とせ九月十四日といふに、かしこきおほせごとによりて、さきにあらはされたる『万葉集畧解』三十巻を、十月望の日、おほやけに奉り給ひければ、白かね十ひらたまはりぬ。かゝる事はおめしもなければ、かしこさも忝なさもいはむかたなしとて、

みめぐみの 露にしぐれに 神無月 ならの落葉も 色やそふらむ

とよみ給ひしとかや。数ならぬ市の下づかさにて、いと／＼おふけなく世に有がたき誉を末の世に言伝へ来るぞ、だれも／＼うらやまざらむや、などかしたはざらんやは。七十まり五つにして、文化五年九月二日うせ給ひき。其いたつきの病の床にふしながらも、花のあした、月のゆふべなどに心をやり給ふさまの事のみにて、いまはのきはまでも、例のみやび心のうせ給はぬぞ、くしきことに有ける。其時、直蔭のいたみの文章「葉末の露」といふがあなれど、ことしげきまゝしるさで、たゞ哥をのみ挙て、

かれてだに 猶蔭たかき たちばなは 葉末の世まで 香に匂はなむ

愛ませし 君しまさねば ことさらに 露けく見ゆる 庭の萩はら

ちゝのみの ちゝにおくれし ことしより 秋はかなしき ものとこそしれ

扱、なきがらは、在し世のまゝにて、かしらをおろさゞりしとかや。さる事はつねにもこのみ給はざれば也けりとぞ。さきつころ妙法院故宮より賜りつる、御まころもてふものを、白き麻もてうつし着せまらせて、ひつぎにおさめものして、代々のたのみ寺なれば、ふた国橋のほとりなる大寺に送りまゐらせて、はぶりたりとぞ。かくてのちに、しるしのおくつきなん物せられて、「橘千蔭墓」と彫りなしたりけり。それが傍に、林衡の作り給へる碑銘あり。筆は巨勢朝臣利和ぬし也けり。叟著所の書、『万葉集略解』『香取日記』『古今集和歌序』法帖『月並消息』法帖『行かひぶり』法帖『万葉新採百首』法帖『山家帖』『須磨の書さし』法帖『うけらが花』〈家集也〉『東歌』〈父枝直の集〉『新百人一首色紙』法帖、なほあまた有ぬべし。をしへ子の中、名の聞えし人少からず。正木千幹、大石千引、一柳千古、岡田真澄、木村定良、其外猶あれどもらしつ。

織錦齋叟

織錦齋の叟、姓は平、名は春海、字士観、号は琴後翁、常の呼名は村田平四郎。父は春道、兄を春郷といふ（何れも哥人なり）。叟をさなき時より縣居の門にあそびて、雪にほたるにあつめ給ひしほどにやがて学成たり。歴史、律令、文辞、詞藻のまなびにたけて、歌よむわざはいふもさら也、仮字文書出る事古今にたぐひなく、ひとりその體をぞ得られたる。又、漢学さへ勝れて詩文などいとめでたう物せられけり。扱、仮字文は、詞をいにしへにとり、心を今にまうけ、體を唐山にかりて、錦を織り、繡をさへよそほひて、文書わざのはしだてをおこされしは、今昔にたへなること、たぐひなかりき。されば序・跋・記・志・論・説・弁・解・伝・書・碑文・弔文など、これかれの文躰を分られたりとか。さしも博士なりける鈴屋翁も、「みやこに哥人廬庵あり、あづまに文人春海あり。我くはだてのおよぶべきにあらず」とて、常にほめたゝへ給ひしとぞ。又、古人の哥のよしあしを見分ることにいとよく妙なりけり。今、其ひとつふたつをとり出てあげつらひのたかきをしるしぬ。そは題詠さかりになりての世の、わろきくせ出来しをさと

されしにぞ有ける。「続古今」後京極摂政殿の「池水半氷」といふ題にて詠給ひし哥、

いけ水を　いかにあらしの　吹分て　こほれるほどの　こほらざるらん

此歌題の「半」といふ文字を、つよくよみかなへんとし給へるにひかれて、哥のまことをうしなひ給へるになん。其故は、池の氷のむすべる事、氷れる所とこほらぬ所と露たかはずひとしからん事は、あるまじきこと也。よしおのづからにさる事ありとも、そはばかりしるべき事にも侍らず。又、池の水を見む人の心にも、かたへは氷り、かたへは氷らずなど、大方には思ひもすべけれど、必しかひとしからむといふ事は思ひよるべき事にも侍らず。さるを、まことになかばなるにいひなきむとし給へるより、其まことの心ばへをうしなふ事を忘れ給へる也。哥は、をさなき心ばへのあるこそ、あはれはふかけれ、かくさかしく氷のむすびむすばざるを、はかりくらぶる事あるべきことかは。「半」といふ文字はよみかなへ給へるやうなれど、何のみやびかなるふしもなく、ふかきあぢはひもなく、いたづらに心あらはれてつたなし。古しへの人は、ことをまうけてよめる哥にも、かゝるいつはりなるおもむきをよめる事は侍らざりき云々。又「新古今」定家卿、

さくら色の　庭の春風　跡もなし　とはそ人の　雪とだに見む

といふうたを難じていへるは、此桜色の庭のはる風といふ事、心得ぬ詞也。およそ桜色などいふ事は、さくらならぬ物をさくらにたとへいはんにはいふべきこと也。さくらをさして、さくら色とはいふべからず。しかるに、桜を吹さそふ風の色ありて、めにみゆるはずなはち桜の花なるに、それをさしてさくら色といはん事は、つたなきいひなしにこそ侍れ。もし是をたすけて花をさしていふはあらず、風をさしていふ也ともいふべけれど、猶さる事ならず。其ゆゑは、風はかたちなくために見えぬものなれば、桜色といふ時は、必其風の、うちなる色をさしていふより外のことなれば也。これも色なる風とか、風も色あるなどやうに、「色」とのみにあはむは難なかるべし。たゞにさくら色といひてはおだやかならず。こはあたらしき事を一ふしいはんとして、あやまりて横ざまになるゝに、心のつき給はざりしもの也。いひふりたる事なれど、花さそふ風のありさまをたとへんには、雪とか浪とかいはむより外の事あるべからず。此哥ぬしの、名高うおはするになづまで、心をたひらかにして見給へ。いとことさまふる詞には侍らずや云々。

また「新古今」源具親、

難波瀉 かすまぬ浪も かすみけり うつるもくもる おぼろ月夜に

といふ哥をあげつらひて、此うたは題詠にのみ心なれたる人は、たくみなりとて、誰もめづる哥に侍れど、よく見れば、まことの気色をうつしたるうたには侍らず。ひとわたりうち見ては、詞のあやたくみにてめづらかなれど、たゞ其かすまぬ波の霞むやうに見ゆる故を、あながちにこまかにことばりたるのみにて、なに波江の朧月夜のさま、げにさぞあらむとおもひやられて、人の心をうごかすばかりのふしは侍らず。古しへの人の気色をうつしいへる哥は、ふと見てはたゞなにともなきがごとくに侍れど、その歌につきて其所のさまの、げにさもこそとおもはれ侍る也。かこのゑうちそふる沖津白波などいへるは、其浦和のさまを今も見る心ちのし侍るにはあらずや已上。こは、春海叟よりある人のもとへおくられし消息文にあなる。其中の哥論をいさゝかとり出たるにこそ。哥の道はおほやけなる物から、さすがにむかしの名高き人の哥をさへ、かくあげつらひ給ひしは、いみじき才のゆゑ成べし。さて、みづからの歌の風調は、古体にありながら、万葉の詞をもちひずして、おのれとひとつのすがたをえられて、幽玄にあぢはひふかく面白かりけり。されば叟、常にさとしけて、うたは心をのぶるものにしあれば、詞を古しへにかり、おのれとひとつの姿をたて、よむこそ哥なれ、かのにせもの作るやうに、ひと哥は古風、一哥は近体など、分よむことは有まじき事とぞ、をしへられしとかや。叟の世にいませしおりの心おきて、より、はたさらぬことをも見き、しまゝを、いさゝか寔に取出て、ありし世しのぶくさりびとはなしにけり。叟、世にもとむる心なくして、やむごとなきおまへわたりにめさるゝことをこのまれば。たゞ花にあくがれ、月にうかるゝほかに、朝夕、文つくゑのものもとさらず。筆とるわざにのみあかし暮されしが、ともすれば、物まなびする人の為にさまたげられ、かくすれば、病の床に起ふしておもふこといはず。書さして事をへられざりしもの数あまたなりき。若くしてなりはひの道にうとく、つひに家をはふらちして百千の宝をうしなひ、はては、ことたらぬがちに年月をおくられけるとなむ。文化二年三月、妙法院一品法親王の、江戸にくだらせ給ひて、天徳寺に御旅のころ、千蔭叟と、もに宮の御まへに近うめされて、つれづれの御慰に、御物がたりなどせさせ給ふ。其をりく事共を叟の記せしが『仙語記』とて一まきあり。哥よみて奉けるに、板文庫・硯箱などくさくの緑たまひぬるとぞ。文化八年二月十三日うせられにき。墓は深川本誓寺にあり。たせ子の刀自てふ才あるをみな子、のこしおかるゝほどに、此刀自、今はかうの殿の御たちにしばくめされて、もはら此道盛に、叟の跡をし、たえずものせ

られしとなむ。叟著所の書、「仮字拾要」「歌苑古題数抄」「作文通弊」「和学大概」「五十音弁護」「齋明紀童謡考後按」「字合称呼考」「神道志」「字鏡考證」「仮字大意抄」「歌語」「椿太詣記」「つくし舟物語」「琴後集」(家集也)、其餘なも有ぬべし。門人に名のきこえしは、清水浜臣、高田與清、本間遊清、片岡寛光、中村安寛、猶さは成べし。***

四大家譜終

〈参考〉 『先哲譜』 独自本文

※ 千蔭は春海がかみつむしろにをることかたく、春海は千蔭のしもつむしろにをることかたくなむありける。

*** 此書、もとおのが永こと、冊子の中にあらはし置つるを、そは巻数も定まらず、大部にもならむものにしあなれば、人々の見やすからむため、別ちに一少冊になしたぬるがよかんものと、友だちのそ、のかしつるま、に、俄に自序をものしてかくは物しつ。